

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370895

研究課題名(和文)木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究

研究課題名(英文)The study of settlements pattern along the Yodo River in Yayoi and Kofun society

研究代表者

若林 邦彦(WAKABAYASHI, Kunihiko)

同志社大学・歴史資料館・准教授

研究者番号：10411076

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：淀川右岸・左岸では、弥生時代～古墳時代にかけて集落立地地点の中心が、低湿地から、扇状地中下部や低中位段丘上へと変化し、低湿地集落数の減少が明確になる時期は古墳時代中期であることがわかった。大規模墳墓造営の有無にはかかわらず、弥生～古墳時代を通じて各小河川流域に集落群そのものは存在し続ける。古墳時代中期には、逆に、地域によっては鍛冶生産や埴輪工房などの専門的集落の存在が確認されはじめる。大規模墳墓を造営する領域に近い場所であることが多い。古墳時代後期あるいは古代には集落分布の高燥地への集中傾向は若干緩和され、低湿地集落の数は増加し始める。降水量変動の減少と社会統合のふたつの要素が背景にあった。

研究成果の概要(英文)：It has been said that Yayoi huge settlements collapsed with the serious flood age of the end of middle Yayoi stage. But our retest of the settlements pattern of Yayoi and Kofun shows that in central Osaka plain, topographic changes by flood were not so big, the small packages of settlement with rice paddy field were not so damaged with flood. In lowland area along Yodo River, from Yayoi to Kofun stage, the main area of settlements moved to slope zone or hill top zone gradually, this tendency became noticeable in middle Kofun stage, AD 5C. In AD4C-5C, we can see separate relationship between settlements and rice paddy fields which shows more integrated and controlled situation by local chief. And scientific analyses show that this term was less liable to change geographically by water flood with frequent heavy rains. This circumstance seemed to help the early Japanese agricultural society to fit for the flood disaster to the relationship between rice paddy field and the settlements.

研究分野：日本考古学

キーワード：考古学 弥生時代 古墳時代 集落 方形周溝墓 古墳 金属生産 水田

## 1. 研究開始当初の背景

弥生～古墳時代を通じて連続的に集落・墳墓の動態を把握し比較する研究はあまり盛んではなかった。弥生時代・古墳時代についてそれぞれ別に研究・分析していたというのが実情であろう。ただ、近年古代学研究会において『集落動態から見た弥生時代～古墳時代の社会変化』（古代学研究会編 2016）が刊行され、弥生時代後半期から古墳時代への連続的集落動態変化の把握へのアプローチは行われてきている。本研究は、それを木津川・淀川流域にフォーカスして行い、詳細な分析を志すものである。

## 2. 研究の目的

木津川・淀川流域は古墳時代の地域首長の盟主古墳の移動・消長のモデル地域として注目を浴びてきた。しかし、そういった古墳・古墳群の消長とその造墓集団と考えられる集落遺跡の動態との関係は、ほとんど論じられていない。また、その前代の弥生時代については集落遺跡の消長などが論じられているものの、弥生時代の墳墓の消長と古墳時代への連続性については議論が少ない。そこで、墳墓・集落遺跡の双方を集成・分析することにより、木津川・淀川流域の考古学的動態を考察する。それにより、6世紀以前の淀川・木津川流域の特質を論じ、それを通して日本古代国家形成期の重要なモデルとして提示したい。

## 3. 研究の方法

木津川・淀川流域に限定して弥生時代～古墳時代の集落動態と造墓活動を通時的に分析することにより、方形周溝墓制からは初期農耕社会の集団関係、さらに古墳の消長からは首長系譜論を冷静に分析することをめざした。2013～2015年度を中心に、当該地域の弥生時代～古墳時代の通時的集落遺跡形成の実態をデータ集成した。これにより、各小地域の遺跡数・居住研究作業は、集団数の増減を把

握する。可能な場合は、鉄生産などにかかわる手工業生産集落の有無も検討した。

同時に、弥生墳墓の階層化傾向の小地域性の分析とともに古墳群形成の変遷を再整理しようと考えた。弥生墳墓の階層化傾向の小地域性は、方形周溝墓群内の各墳墓の規模・形態と埋葬のありかたの相関を分析した。また、古墳群の変遷については、最新の調査データや副葬品の編年観の変化に照らして、従前の古墳群変遷を整理した。

具体的作業として、おもに木津川・淀川流域地方の弥生～古墳時代集落・墳墓に関して以下の2点についての分析作業を行った。

淀川右岸・左岸における、弥生・古墳時代集落発掘調査データの集成

詳細な墳丘形態・時期が不明な古墳について、現地調査により測量図を作成

## 4. 研究成果

結果として、淀川・木津川水系（京都盆地含む）の、集落と墳墓の分布の変遷をみると、そこには小地域ごとの差異とともに重要な共通性がある。その共通性は以下の5点である。

(1) 弥生時代～古墳時代にかけて集落立地地点の中心が、三角州堆積環境などの低湿地から、扇状地中下部や低中段丘上へと変化する。弥生時代に低湿地での集落形成が多い理由としては、水田可耕地に隣接して居住地を設ける状況、つまり個々の集落に付帯して水田経営がなされることが多いことを示している。古墳時代にはそういった経営の個別性が変質する可能性が高い。

(2) この変化の進行は、沖積地面積の少ない地域（淀川左岸・木津川流域）では早い段階（古墳時代前期）に進行するが、低湿地集落数の減少が明確になる時期は古墳時代中期である。

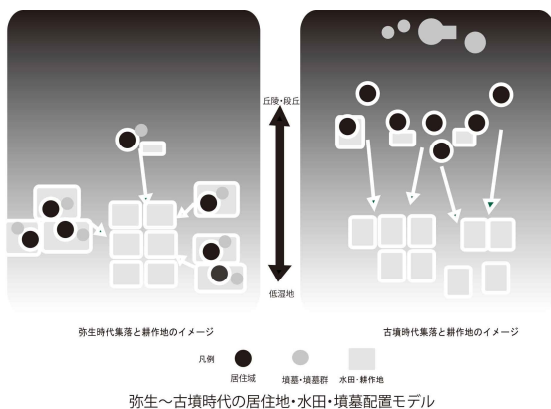
(3) 上記の集落分布の変化はみられるものの、大規模墳墓造営の有無にはかかわらず、

弥生～古墳時代を通じて各小河川流域に集落群そのものは存在し続ける。古墳時代中期の大規模墳墓の集中が目立つ地域にだけ人口集中が認められるわけではない。

(4) 古墳時代中期には、地域によっては鍛冶生産や埴輪工房などの専門的集落の存在が確認されはじめる。それは、古墳時代中後期に大規模墳墓を造営する領域に近い場所であることが多い。

(5) 地域によっては、古墳時代後期あるいは古代には集落分布の高燥地への集中傾向は若干緩和され、低湿地集落の数は増加し始める。同時に、中小河川流域ごとに背後の丘陵部に群集墳を形成し、その内容に小地域間の大きな階層的差異はみとめにくい。

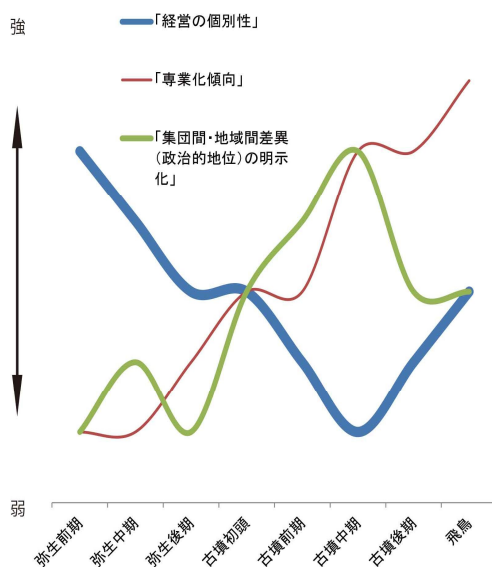
(1)・(2)からは、モデル図1を描くことができる。筆者は、別稿で、水田耕作地や墓域が付帯した弥生時代の居住集団のことを基礎集団と呼んでいる。(1)・(2)からは、基礎集団の個別的水田経営要素から、協業的農耕地配置・経営へと移行する方向性を確認することができる。この共同性の高まりは領域的秩序が形成されないと進行せず、弥生中期を典型とする、集団間関係だけでは形成されにくい。言い換えれば、上述の弥生時代から古墳時代への集落立地や集団形成の特徴の差異・変化はそのプロセスを間接的に示していると言えよう。



モデル図1

また、(3)からは、特に古墳中期に明確化する社会変化が確認できる。先述のように、小地域社会内部では水田耕作地の管理経営に統合化が進行する。さらに、(4)からは、同時に専門生産の強化傾向がみられることになる。それに大規模墳墓形成が連動することになる。しかし、専門生産が明確でない地域でも大規模墳墓形成はある。柏田・古川・浅井らが明らかにした木津川流域での集落動態の現状は、専門生産活動が確認されにくい地域でも、古墳時代中期に大規模墳墓群（地域首長墓）が形成されることを示している。これについては、集団間関係の変化を王権との関係での変動という理解を適応する余地がある。しかし、あくまで王権と地域集団の関係だけでなく、各領域での水田耕作をめぐる個別経営性の減退と統合化が背景にあることは確認しておきたい。(1) (2) (3)と(4)をあわせれば、統合化は専門性の高まりと関連することがわかる。

一方で、(5)のように後期には上記の個別経営の傾向は緩む。このことは、おそらく中小河川古語に進行する大規模経営傾向が一番高まるのが古墳中期といえよう。その傾向が緩むと地域間の際が明示されにくい群集墳形成が各地で進むという理解が可能であろう。



モデル図2

淀川・木津川流域で観察された上記の要素の変化を図式化してみる。上記分析から考察することの可能な社会変化要素としては「経営の個別性」「専門化傾向」「集団間・地域間差異（政治的地位）の明示」である。「経営の個別性」は集落立地がその判断材料となり、「専門化傾向」については鍛冶生産集落や埴輪工房の存在と立地が注目されるだろう。また、「集団間・地域間差異（政治的地位）の明示」は、弥生時代であれば方形周溝墓間もしくは周溝墓群間の階層化傾向が、古墳時代であれば大規模墳墓の立地がその観察点となろう。この観点から提示できるモデルは図2である。それぞれの要素が「強い」「弱い」を模式化し、変化の曲線の推移を重ねている。このモデル図をもとにすれば、経営（社会的統合）の個別性が高い弥生時代には専門化傾向や政治的地位の明示は低い状態にある。一方、経営個別性が弱まり地域統合が高まる時期には集団間・地域間差異の明示傾向は高まる。さらに興味深いことは、古墳時代後期への変化の方向性をみると、その相関は不可逆的に傾向を高めるだけでなく、経営個別化傾向の再度の高まりによって、集団間・地域間差異の明示傾向が弱まることである。

本研究では分析できていないが、7 - 8世紀の古代前半社会においては、管見によれば低湿地集落は安定的に存在する。また、8世紀に導入される律令制における農業経営形態は、文献上のこととはいえ各集団（戸）の個別経営性が高いことを前提にした制度設計といえる。このように考えれば、古墳時代中期は個別経営性が極端に低く、それにより統合された小地域間の関係もより階層的になることが予想される。古墳後期以後は、王権や国家制度変質により個別経営の変質（弥生時代と同じという意味ではない。別の形の個別化を想定するべきであろう）が進行し、考古学的には集団間・地域間差異（政治的地位）の明示の必要性は低下する。古墳時代の各地域

の墳墓造営の在り方は、「王権とのかかわり」といった列島規模の中心-周縁関係で理解することも可能だが、社会要素の変化との相関で理解し、政治的關係がどのような社会構造変化の方向性のもとで形成されるかという視点でアプローチする必要もあろう。

そこから想定できることは、社会変化要素としては経営の個別性/統合性が急変する時期に、墓制において、統合者（地域首長）の明示や彼らおよび彼らを要する集団間の関係性（階層性）が強く明示されることである。古墳時代社会の形成や変遷については、地域首長間のネットワーク関係の変質が常に注目されてきた。しかし、水田経営あるいはそれに連動する各居住集団（基礎集団）の相関関係の質自体を考慮することによって状況を理解することが容易となる。本研究で明らかにできたことは、水田経営などの個別性が急速に減少する時期に、古墳とそれをめぐる秩序が形成され変質し、その安定化によって、そういったモニュメントが社会装置としての役割を終えていくことである。墳墓に表現される集団間差異の明確化・階層化・複雑化は、集団経営の複雑化の進行時期に高まることがうかがえる。

1970年代以前には、こういった要素関係は、史的唯物論の枠組みにもとづく社会的な「生産関係」の発展に基づいて起こると想定され、議論は進行した。

しかし、1980年代以後、墳墓（群）間・古墳（群）間関係の背景に社会構造の差異を強調する論調は低調である。背景には、集落・集団相互間に生じる社会関係の構造を読み取ることが、集落データ増大に反比例して困難になってきたことが挙げられよう。また、経済的側面だけを、社会変化の指標とアプリアリに想定することへの反発があると考えられる。代わりに、「対外交渉」や「王権」といった政治的タームが議論の中心となってきた。本研究ではそのような方向性とは別に、しかし、

単純に演繹的な社会構造発展想定を基盤としない社会構造要素の設定を試みた。結果として、経営の個別性/統合性を集落立地によって想定することによって、議論を進める方向性を提示してみた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

1. 若林邦彦 2017「ムラの立地から古代国家形成を考える」『科学』87巻2号 岩波書店 p. 171-180 査読無し

〔学会発表〕(計 1件)

1. 若林邦彦 2014年12月20日「集落研究からみた弥生～古墳時代の変化」『古代学研究会例会拡大シンポジウム』大阪歴史博物館(大阪府・大阪市)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

若林 邦彦 (WAKABAYASHI, Kunihiro)

同志社大学・歴史資料館・准教授

研究者番号：10411076

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

伊藤 淳史 (ITO, Atsushi)

京都大学・総合文化財研究センター・助教

研究者番号：70252400

(4)研究協力者

藤井 整 (FUJII, Hitoshi) 京都府教育庁・文化財保護課・副主査

古川 匠 (FURUKAWA, Takumi) 京都府教育庁・文化財保護・課技師

濱田 延充 (HAMADA, Nobumitsu) 寝屋川市・教育委員会・文化財担当技術職員

真鍋 成史 (MANABE, Seiji) 交野市教育委員会・社会教育課長

宇野 隆志 (UNO, Takashi) 奈良県立橿原考古学研究所・研究員

吉田 知史 (YOSHIDA, Tomofumi) 交野市教育委員会社会教育課・文化財担当技術職員